

おか つ はら
岡津原 III 遺跡

発掘調査報告書

1992

掛川市教育委員会



序

掛川市域は古くより人が住み着き、歴史が重ねられてきた地域であります。市内各所にはその生活の歩みが記された遺跡が数多く残されております。その遺跡も現在のめまぐるしい社会的要請により、その姿を変えたり、消滅したりすることが多くなってきました。

私たちの今ある生活は、先人のたゆまぬ不屈の努力の上にもたらされたことを思う時、はるか昔この地にそのなりわいを留めた先人に畏敬の念を抱かずにはおりません。

今回調査した岡津原遺跡は、掛川市の西部を流れる原野谷川の造った沖積平野の中にある丘陵地であり、すぐ西に大古墳群の存在する吉岡原、高田原を原野谷川を挟んで眺め、東には県道天竜線や天竜浜名湖鉄道を控えております。この台地は周囲にも重要な遺跡を擁しており、現在ではその多くを茶園として利用されております。

今回市道富部各和線の道路拡幅工事にともない、掛川市教育委員会により発掘調査をおこないました。その結果、弥生時代の方形周溝墓など貴重な遺構が検出でき、掛川市の古代史解明に豊富な資料を提供できることができました。この発掘調査の成果が、生涯学習都市掛川市の潤いのあるまちづくりに活用されるよう願うものであります。

最後に本書の刊行にあたり関係者のご指導に対し厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

掛川市教育委員会

教育長 西ヶ谷兔志雄

例　　言

1. 本書は、市道富部各和線拡幅工事に伴い、平成3年6月25日より平成4年3月31日まで実施した
　静岡県掛川市岡津595-1外に所在する岡津原Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は掛川市教育委員会の前田庄一の助言を得て、井村広巳が行った。
3. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。
　本樺公太郎、大庭虎雄、鈴木福次、土屋敬一、鈴木辰江、松浦せい子、長谷川幸子、鳥居鈴江、
　萩田ふみ、大石トモ、松浦てつ子、石龜まつ、鈴木秀子、萩原かく、岡山よね子、堀内ひろ、
　桑原京、鈴木ひで、鈴木美代子、山崎国、鈴木はつ子、伊藤和子、松井田鶴子、椿葉豊子
4. 発掘調査ならびに本書作成にあたり、次の方から御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表
　したい。
　向坂鋼二、鈴木敏則、佐藤由紀男、松井一明（敬称略）
5. 本書の編集、執筆は井村が担当した。ただし第I章1については、掛川市教育委員会の松本一男
　が執筆した。遺物の写真撮影は掛川市教育委員会の戸塚和美が担当した。
6. 発掘調査事業業務は掛川市教育委員会教育長西ヶ谷兔志雄、社会教育課棟葉稔、参事岩井克允、
　文化係長沢村久雄のもとに社会教育課が所管した。
7. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 挿図中の等高線は、10cm間隔である。
2. 遺構名称は、次のように表した。
　SD：溝、SP：小穴（ピット）、SX：不明土壤

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要	
1. 調査に至る経緯と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡をめぐる地理的、歴史的環境	3
II 調査の内容	
1. 遺 構	6
2. 遺 物	14
III ま と め	16

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第2図 遺跡の周辺地形図	4
第3図 グリッド配置図及び遺構全体図	5
第4図 SD 0 2、0 3 実測図	6
第5図 SD 0 4、0 5、0 6、1 6 実測図	7
第6図 SD 0 7、0 8、1 0 実測図	8
第7図 SD 0 9、1 1、1 2、1 4、1 5 実測図	10
第8図 SD 1 3 実測図	11
第9図 SX 0 1、0 3、SP 0 2、0 4、東端壁面土層図実測図	13
第10図 出土遺物実測図	15

図版目次

- 図版I 調査区西側全景 (西より)
図版II 調査区中央部全景 (西より)
図版III 上 調査前全景 (東より)
下 方形周溝墓とSD07 (東より)
図版IV 上 SD02、03、04 (東より)
下 SD04、05 (南より)
図版V 上 SD07 (東より)
中 SD08 (西より)
下 SD09 (東より)
図版VI 上 SD10 (東より)
中 SD11 (東より)
下 SD12 (東より)
図版VII 上 SD13遺物出土状態 (西より)
中 SD13完掘状態 (東より)
下 SD14、15 (東より)
図版VIII 上 SP04 (南より)
中 SX01 (東より)
下 東端壁面土層
図版IX 出土遺物



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

1. 女高 2. 高田 3. 花ノ腰 4. 濑戸山I 5. 濑戸山II 6. 濑戸山III 7. 吉岡原 8. 高田上ノ段 9. 吉岡下ノ段 10. 中原 11. 溝ノ口 12. 今坂 13. 大向 14. 岡津原I 15. 岡津原II 16. 岡津原IV 17. 岡津原III 18. 岡津原V 19. 金鉢原 20. 二反田 21. 山下 22. 権現山 23. 宇佐八幡境内 24. 原川 25. 坂尻

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

岡津原Ⅲ遺跡が所在する岡津原は、画文帶神獸鏡を出土した岡津奥ノ原古墳（前方後円墳？）（静岡県1930）、あるいは岡津原の南端に発見した岡津横穴群A・B群、向山古墳1号・2号墳（静岡県教育委員会1966）等の所在で知られる、河岸段丘面をもつ独立した丘陵である。この他岡津原は、縄文時代から古墳時代までの集落跡等の遺跡が多数集中していることでも知られているが、これまでに調査例はなくその実態は明かでない。

市道富部各和線は掛川市富部から掛川市各和に通じる地方道で、掛川市から袋井市はもとより天竜市へ至る流通の道として多くの車両が利用する道である。今回調査の対象となった地点は、交通量の多さに比べ道幅が狭く、またバス運行車線であることから地元区から拡幅されたしとの要望のあった箇所である。

平成2年9月20日静岡県教育委員会が委嘱する文化財巡回調査員から「岡津原Ⅲ遺跡地内で、道路拡幅工事が行われている。」旨の通報があった。掛川市教育委員会の職員が現地に急行したところ、工事はすでに終盤をむかえていた。現地では土器の出土・遺構の検出を確認しなかったが、施工主体者である掛川市役所土木課に「遺跡地内の工事が行われており、遺跡の一部が消滅した。今後このような事態を起さないよう」等厳重な忠告を与え、今後の計画を聽取した。それによると、平成3年度中に続き路線での工事があることを確認し、工事計画に変更が認められない場合には、工事前に発掘調査を実施しなければならないことを伝えた。この日が端緒となり、岡津原Ⅲ遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

2. 調査の方法と経過

今回の調査は、発掘区域が東西方向に長く延びていることから、道路上に打たれた2本の紙を東西の基本線とし、グリッドを設定した。基本線の方位は、N-79°52'8" - Eである。

調査グリッドは、1辺5m四方の区画とした。調査を西側から始めたため、杭の東西の列を、西からA、B、C、・・・とし、南北の列を北から1、2、3、・・・とした。この東西、南北の列の交点をその杭の名称とした。そして、グリッド名は、5m四方の区画の北西角の杭の名称と一致させた。（第3図参照）

調査は、人力によるトレンチ掘りをした後、重機による茶樹の抜根、表土の除去を行った。そして、人力により粗掘、精査、遺構の掘削を行った。実測作業は、遺構全体図を1/20の縮図で、遺物の出土状態図等を1/10の縮図で行った。写真による記録は、6×7判（白黒）、35mm判（白黒、リバーサル）のカメラを使用した。

尚、排土置き場所、プレハブの設置場所等の事情により、まず東西の両部分を調査し、最後に中央部分を調査した。

調査の経過

平成3年6月25日 調査区の範囲を決め、2m四方のトレンチを6か所設定した。トレンチ内よりビット、土器片を確認した。

6月27、28日 重機による茶樹の抜根、表土の掘削を行った。(A1区～A10区、B26区～G35区)

7月1日～15日 人力による粗掘、精査、遺構の掘削を行った。並行して、杭打ち、土層図、平面実測を行った。そして、清掃後、各遺構、全景の写真撮影を行った。

7月17、18日 重機による中央区部分の掘削、並行してB26区～G35区の埋め戻しを行った。

7月19日～8月2日 前半部と同様に人力による、粗掘、精査、遺構の掘削、そして実測作業を行った。その後、写真撮影を行った。

8月3日～8日 発掘器材などのたづけ、撤収、プレハブの撤去を行った。

8月12日 土木課へ現地を引き渡した。

3. 遺跡をめぐる地理的、歴史的環境

岡津原Ⅲ遺跡の所在する掛川市は、静岡県の西部と中部の境に位置する。東は金谷町、菊川町、南は大東町、西は袋井市、北は森町に接している。さて掛川市の地理的環境を概観してみると、1,800万年から100万年前(新第三紀中新世から第四紀)にかけて形成され堆積層を起源とする丘陵地帯がほとんどを占める。中新世前期の堆積層は倉真、西郷層群、鮮新世は掛川層群、更新世は曾我層群、そして洪積世は小笠山丘陵を形成した小笠山疊層である。掛川層群を中心に化石が多く発見され、日本の新第三紀の地層の模式のひとつとされている。⁽¹⁾

岡津原Ⅲ遺跡は、掛川市の西方“岡津原”と呼ばれる河岸段丘上に位置する。この低位段丘堆積物は、洪積世に原野谷川によって形成されたもので、右岸の和田岡原でも同様である。本層は、砂岩、頁岩の疊層となり、一部にシルト層をはさみ、厚さは最高5mに及ぶ。下位は、新第三紀鮮新世に形成された掛川層群の砂泥互層が存在する。また上部には黒ボクが生成している。現在の岡津原は東西500m、南北2kmを測る。⁽²⁾⁽³⁾ なお岡津という地名は、高地に立地することに由来する。

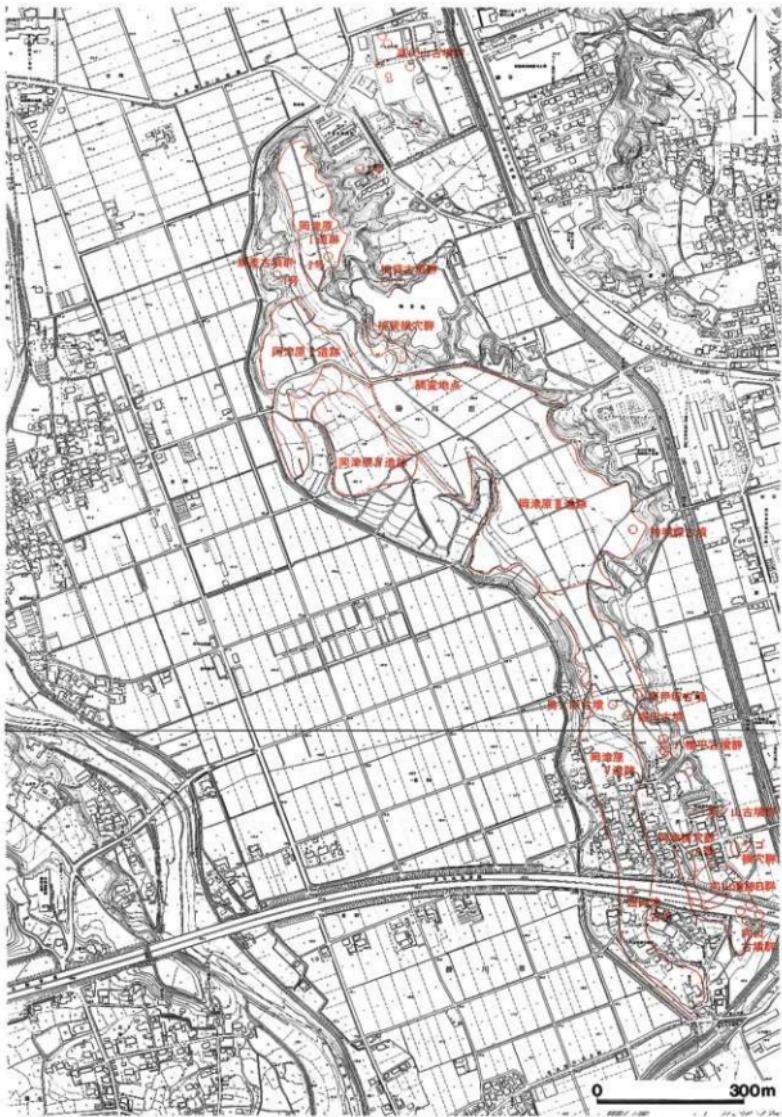
次に岡津原を中心歴史的環境を述べていく。

岡津原は東名高速道路建設の際に南側先端の部分が発掘調査されたのみで、あまり調査が行われていない地域である。⁽⁴⁾

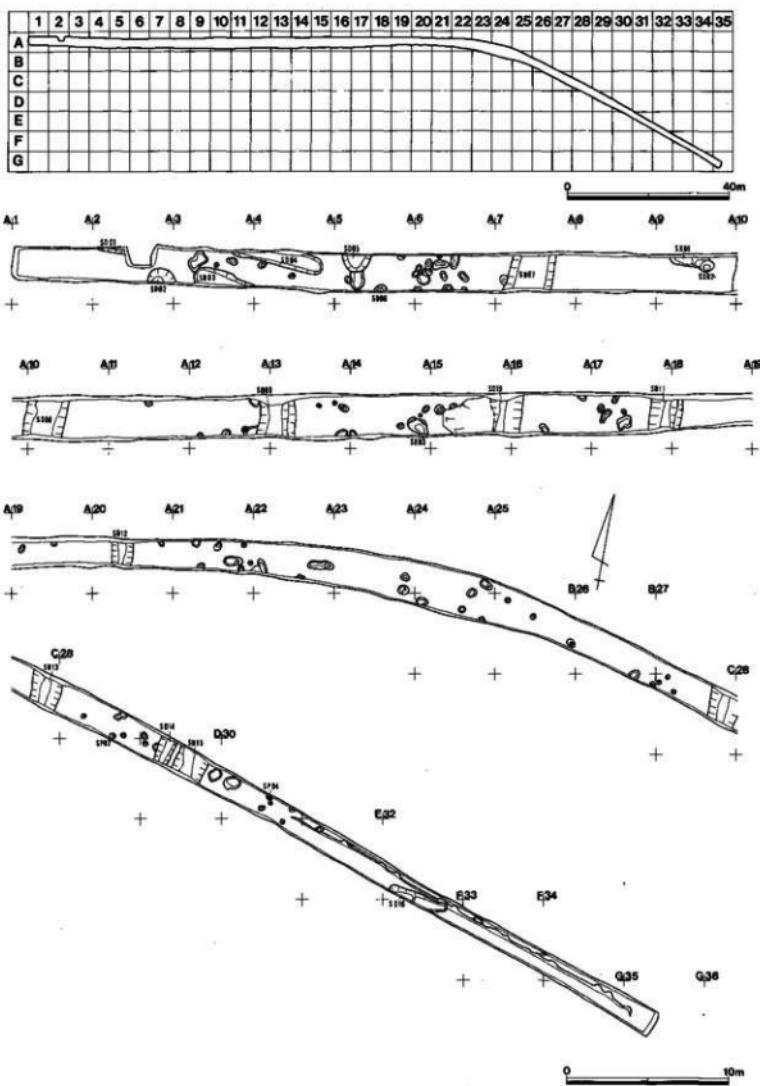
岡津原に人々が生活を始めたのは、縄文時代早期のようである。⁽⁵⁾ 岡津原の南端、向山遺跡で押型文土器が出土している。そして縄文時代中期になると遺跡の広がりがみられ、今回も2点であるが土器片が出土している。岡津原Ⅰ、Ⅱ遺跡でも表探資料が確認されている。

弥生時代では今回の調査で検出された土器から、中期前葉の遺跡の存在が推定されるに至った。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物は、岡津原Ⅰ～V遺跡で確認されているように台地面各地点で認められている。

古墳時代中期になると、段丘縁辺部に古墳が形成され始める。画文帶神獸鏡を出土した奥ノ原古墳(消滅)、変形獸文鏡を出土した西岡津古墳や神明塚古墳が存在する。後期になると、小支群の群集墳と横穴群が段丘南斜面に築かれる。群集墳は、直径10m～15mの円墳で構成されるもので、向山古墳群と八幡平古墳群がある。両方とも4、5基と小さな群である。岡津横穴群は2群に分かれ、計24基からなる。6世紀中葉から8世紀に造営された。⁽⁶⁾



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 グリット配置図及び造構全体図

II 調査の内容

今回の調査では、溝16条（方形周溝墓4基の溝を含む）、不明土壌3、ピット多数を検出した。遺物の量が極めて少なく、時期を明確にできないものもある。多くは、弥生時代中期を中心とする遺構と考えられるが、遺構、遺物について順次説明していくことにする。

1. 遺構

SD-01

A-2区より検出した。調査区外が溝の中心となるもので、幅、深さ共に不明である。土器小片が覆土中より出土した。

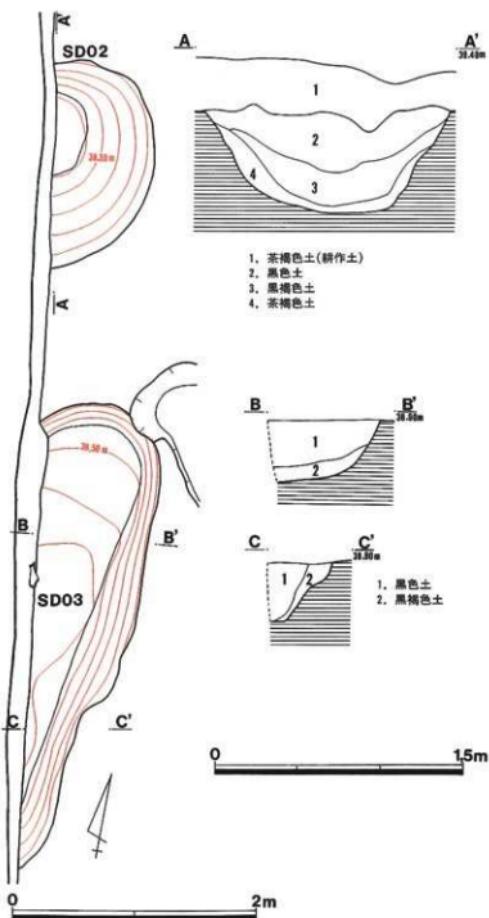
SD-02 (第4図)

A-2区からA-3区にかけて検出した。溝の中心は、南へ広がると考えられる。幅170cm、深さ（検出面より）50cmを測る。形状はゆるやかなU字形を呈する。覆土は以下の3層に分層された。

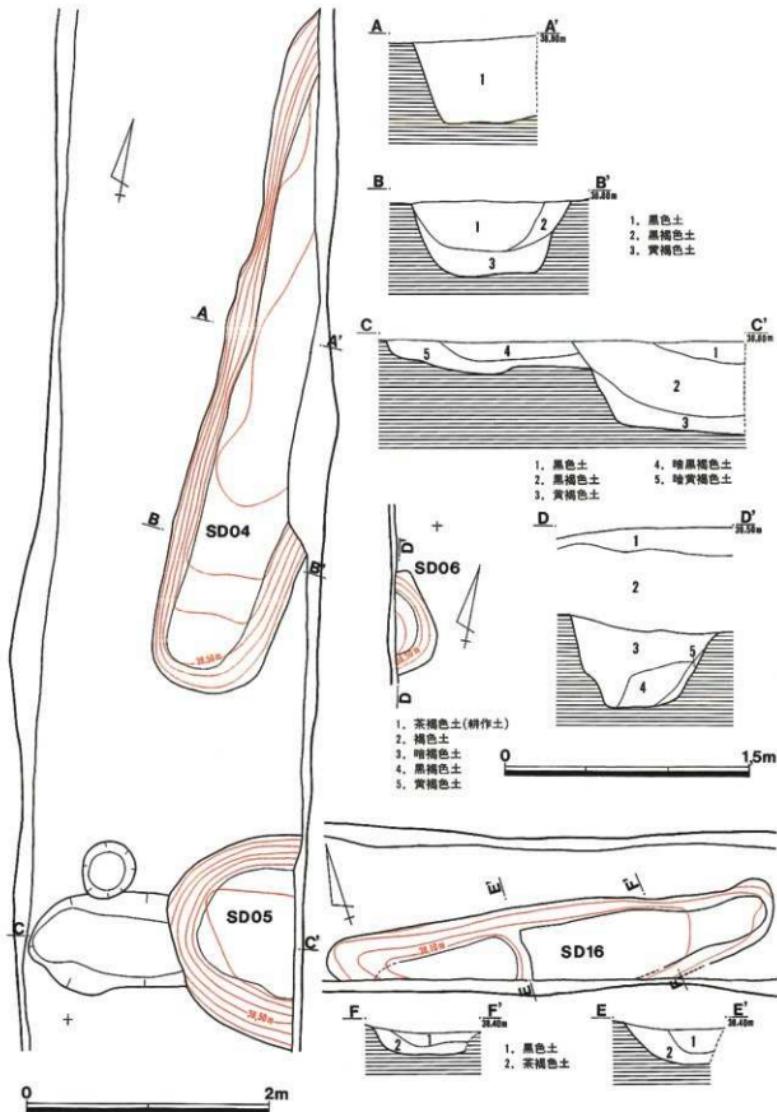
1. 黒色土（粘質が強く、しまりがある）
 2. 黒褐色土
 3. 茶褐色土
- 遺物は、土器小片が出土したのみである。

SD-04 (第4図)

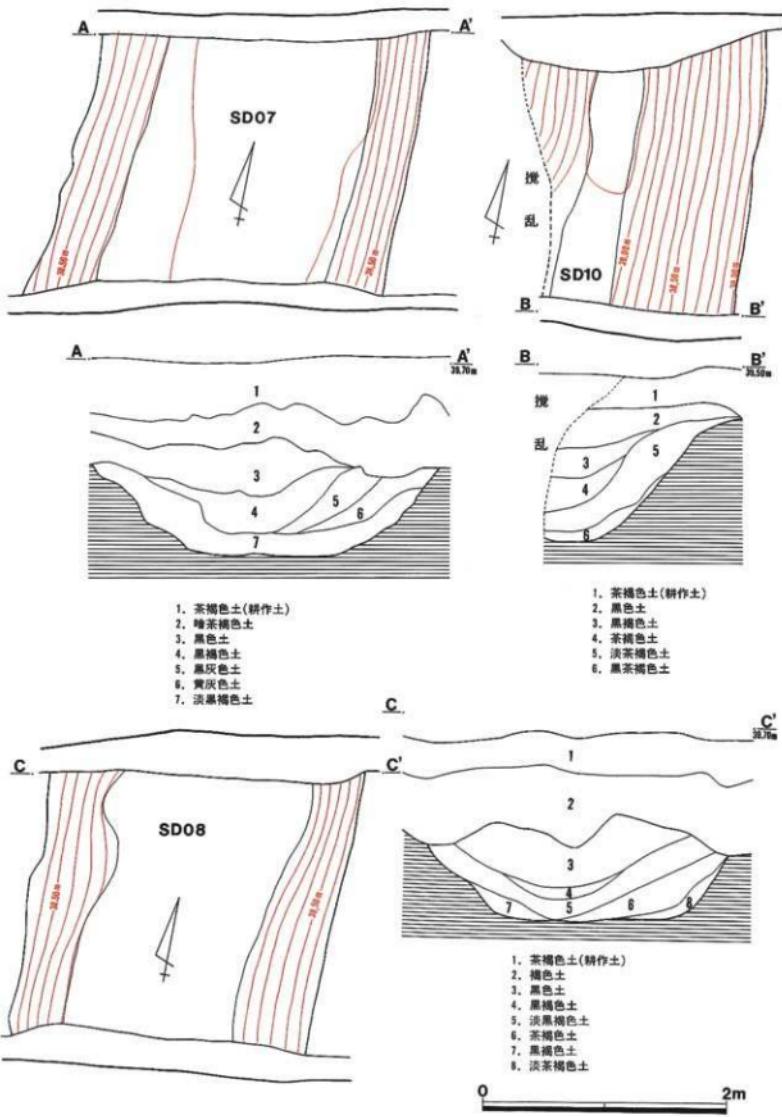
A-3区より検出した。調査区外へ延びているが、幅140cm（推定）深さ50cmである。SD-03との間隔は、100cmであり、平行すると考えられるSD-04との間隔は、150cmを測る。南壁下層で細頸壺の上部が出土した。



第4図 SD-02、03 実測図



第5図 SD04、05、06、16実測図



第6図 SD07、08、10実測図

SD-04 (第5図)

A-3区からA-4区にかけて検出した。溝の中心は北側調査区外へ広がる。幅110cm、長さ600cm(推定)、深さ55cmを測る。断面の形状はゆるやかなU字形を呈する。覆土はA-A'ラインでは1層に、B-B'ラインでは3層に分層された。1の黒色土は、共通する。遺物は、覆土中より壺の口縁部が出土した。

SD-05 (第5図)

A-5区より検出した。溝は北側調査区外へ延びる。幅180cm、深さ60cmを測る。南側の土壤を切って構築されている。SD-04との間隔は、100cmを測る。遺物は、全く出土しなかった。

SD-06 (第5図)

A-5区より検出した。検出したのは、幅80cmと僅かではあったが、覆土の様子からみて、SD-01～05と同様な溝であると考えられる。遺構の中心は南側調査区外へ広がる。遺物は全く出土しなかった。

SD-07 (第6図)

A-7区より検出した。東西に長く調査区を直交するように延び、幅280cm、深さ70cmを測る。溝の下端の幅は、150cmを測り、幅広の溝であるといえる。立ち上がりもゆるやかである。遺物は、壺口縁部片が出土した。

SD-08 (第6図)

A-9区からA-10区にかけて検出した。調査区を直交するように延び、幅250cm、深さ55cm、下端幅140cmを測る。立ち上がりのゆるやかな幅広の溝である。SD-07との間隔は10mである。遺物は、太頸壺の上半部が出土した。

SD-09 (第7図)

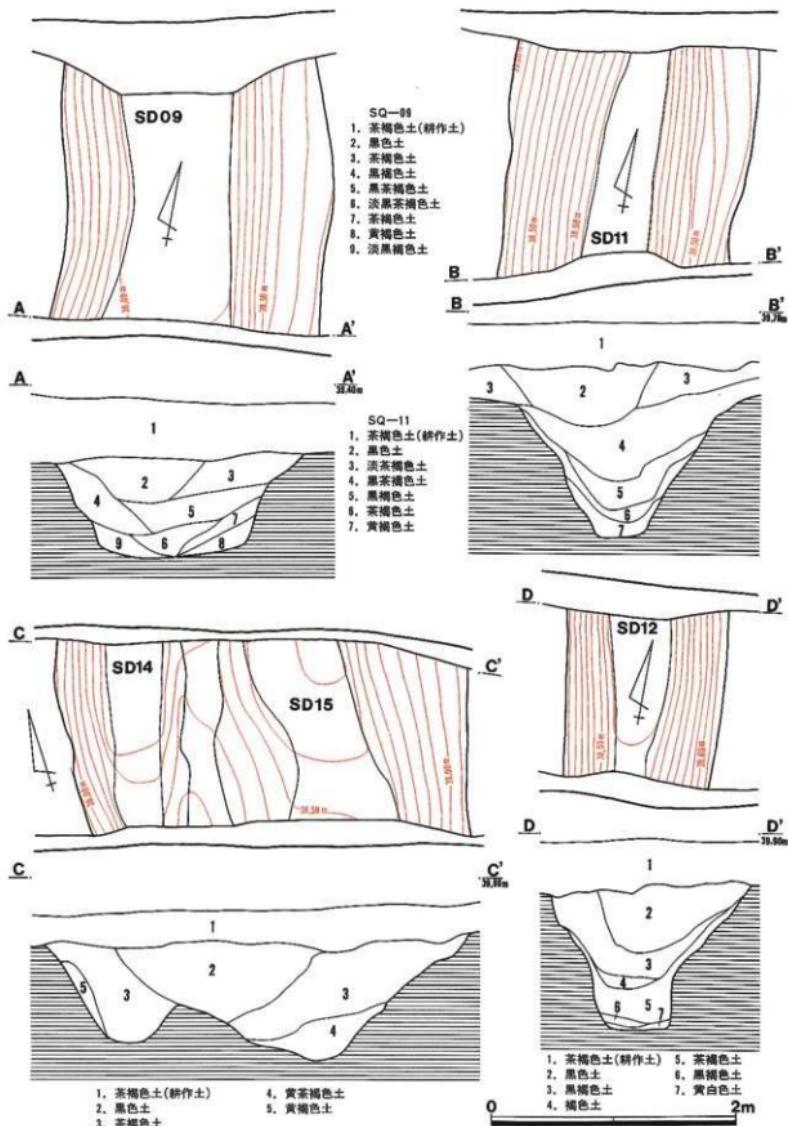
A-12区からA-13区にかけて検出した。調査区を直交するように延び、幅220cm、深さ80cm、下端幅80cmを測る。SD-08との間隔は11mである。遺物は、壺の口縁部片が出土した。

SD-10 (第6図)

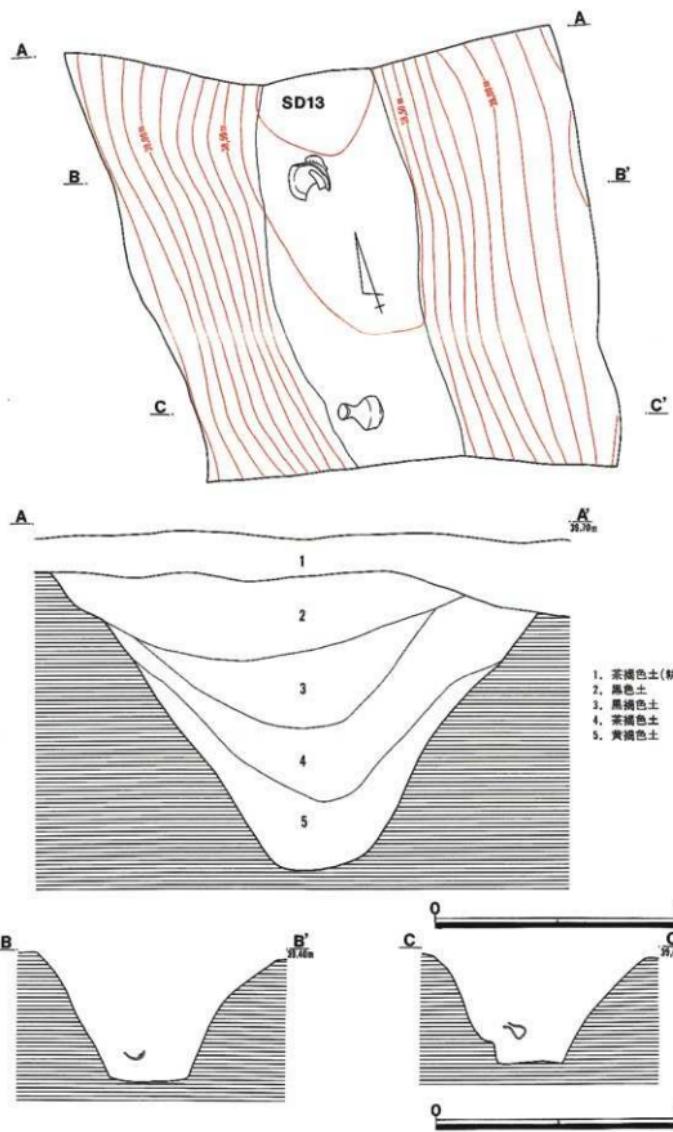
A-15区からA-16区にかけて検出した。調査区を直交するように延びる。調査区南側にある送電線鉄塔建設工事により、遺構の西側は壊されたようである。そのため幅は不明、深さ110cm、下端幅40cmを測る。断面形状はV字形に近く、立ち上がりは急である。SD-09との間隔は11mと推定される。遺物は出土しなかった。

SD-11 (第7図)

A-17区からA-18区にかけて検出した。調査区を直交するように延び、幅200cm、深さ110cm、下端幅40cmである。断面形状は、V字形で立ち上がりは急である。SD-10との間隔は9mである。遺物は、土器小片が出土したのみである。



第7図 SD09、11、12、14、15実測図



第8図 SD13実測図

S D - 1 2 (第7図)

A-20区より検出した。調査区を直交するように延び、幅120cm、深さ80cm、下端幅40cmである。断面の形状は、V字形である。SD-11との間隔は10mである。遺物は、土器片ばかりであるが、壺の肩部の破片と認められるものが含まれる。

S D - 1 3 (第8図)

C-27区からC-28区にかけて検出した。調査区を直交するように延び、幅200cm、深さ100cmを測る。断面形状は、V字形である。遺物は、検出した遺構の中で最も多く出土した。出土状態図で表した。ほぼ完形に近い小型の細頸壺と高环の他に、大型の壺の破片も確認した。土器はいずれも、5層の黄褐色土から出土した。この溝の時期を、決定できる貴重な資料であるといえる。

S D - 1 4 、 1 5 (第7図)

D-29区より検出した。両溝には新旧関係が認められ、SD-15はSD-14を切っている。底の立ち上がりからみて、SD-14は比較的幅の狭い溝であったといえる。深さは80cmを測る。SD-13との間隔は、7mである。遺物は、壺の体部破片が出土している。

S D - 1 6 (第5図)

E-32区からF-32区にかけて検出した。幅60cm、長さ280cm、深さ20cmである。南側調査区外へ広がる。他の遺構に比べて検出面が深いのは、お茶の改植により上部が掘削されていたためである。遺物は、全く出土しなかった。

S X - 0 1 、 0 2 (第9図)

A-9区より検出した。北側調査区外へ広がる。形状は橢円形を呈す。規模は推定ではあるが、SX-01が、170cm×70cm、深さ50cm、SX-02が90cm×60cm、深さ48cmを測る。SX-02をSX-01が切る。立ち上がりは急である。遺物は、全く出土しなかった。

S X - 0 3 (第9図)

A-14区より検出した。南側調査区外へ広がる。形状はいびつな橢円形を呈す。遺物は全く出土しなかった。

S P - 0 2 (第9図)

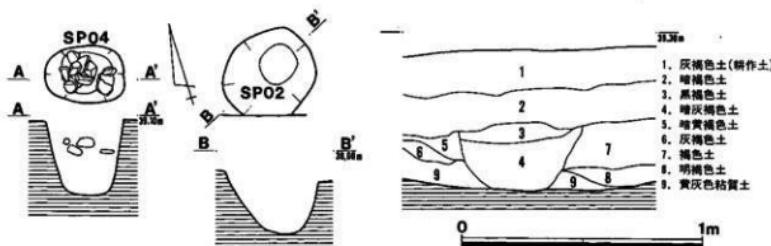
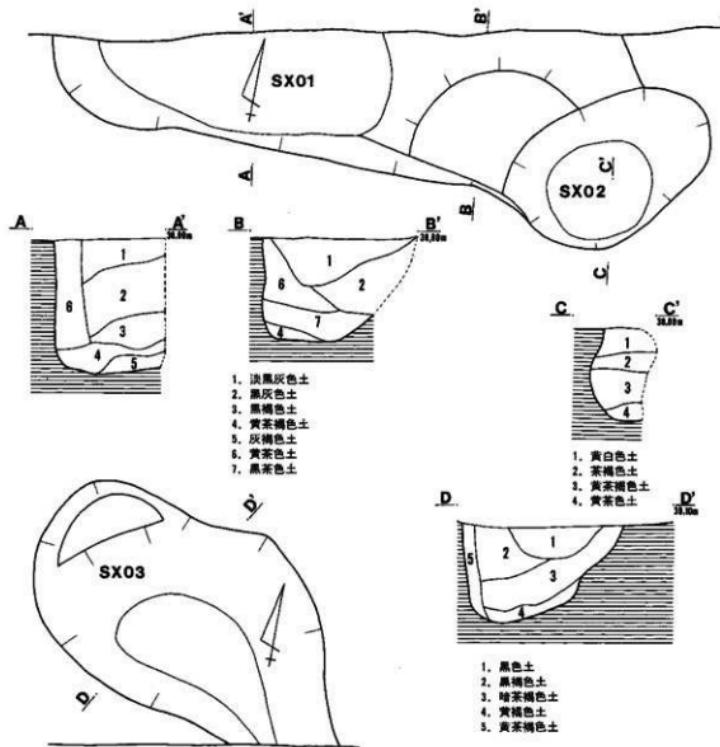
D-28区より検出した。規模は、40cm×35cm、深さ20cmを測る。縄文時代中期の土器片を出土した。

S P - 0 4 (第9図)

D-30区より検出した。規模は、30cm×25cm、深さ30cmを測る。SP-04の覆土中には、5~6cm大の小石の集石が見られた。集石は、底面までは達していない。遺物は出土しなかった。この穴の性格は不明である。

その他の遺構

東端壁面の土層で、遺構を確認した。幅70cm、深さ40cmを測る。土壙か溝状の遺構であると考えられる。



第9図 SX01、03、SP02、04、東端壁面土層図実測図

2. 遺物 (第10図)

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ1箱にも満たないわずかなものであった。遺物の全く出土していない遺構もあるが、順次説明していくこととする。

1は、SD03下層より出土した細頸壺の上半部である。口径は9cmを測る。頸部は細長くゆるやかに外反し、口縁部は折り返し気味に作られている。肩部は張らずに、スムーズに体部へと続く。まず頸部に櫛描横線文を施す。肩部は縦位の櫛描文で8分割した後、斜格子文を施す。斜格子文は、左下がりのものが先で、右下がりのものが後である。又、頸部に断面円錐形の貼付文を8方向に施す。頸部上半部は縦方向のヘラミガキを施す。この細頸壺は、典型的な白岩式土器といえる。

2は、SD04より出土した壺の口縁部破片である。口唇部は面をもち、凸帯のはがれた痕跡が残る。凸帯の下には、粗い条痕が認められる。

3は、SD07より出土した壺の口縁部破片である。2と同様に口唇部には面をもち、口縁部直下に凸帯をもつ。凸帯は軽くつまんで作りだされている。2、3ともに弥生時代中期前葉の丸子式土器といえよう。

4は、SD08より出土した太頸壺の口縁部である。器径は14cmを測る。口縁部には押引文が施されている。体部には、細かい条痕が施される。

5は、SD09より出土した壺の口縁部破片である。口唇部には、細かい押引き、体部には、粗い条痕が施される。4、5ともに、弥生時代中期前葉までさかのばると考えられる。

6、7は同一個体でSD12より出土した細頸壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部には刷毛目があり、肩部にかけては竹管刺突文が施される。弥生時代中期後葉の白岩式土器である。

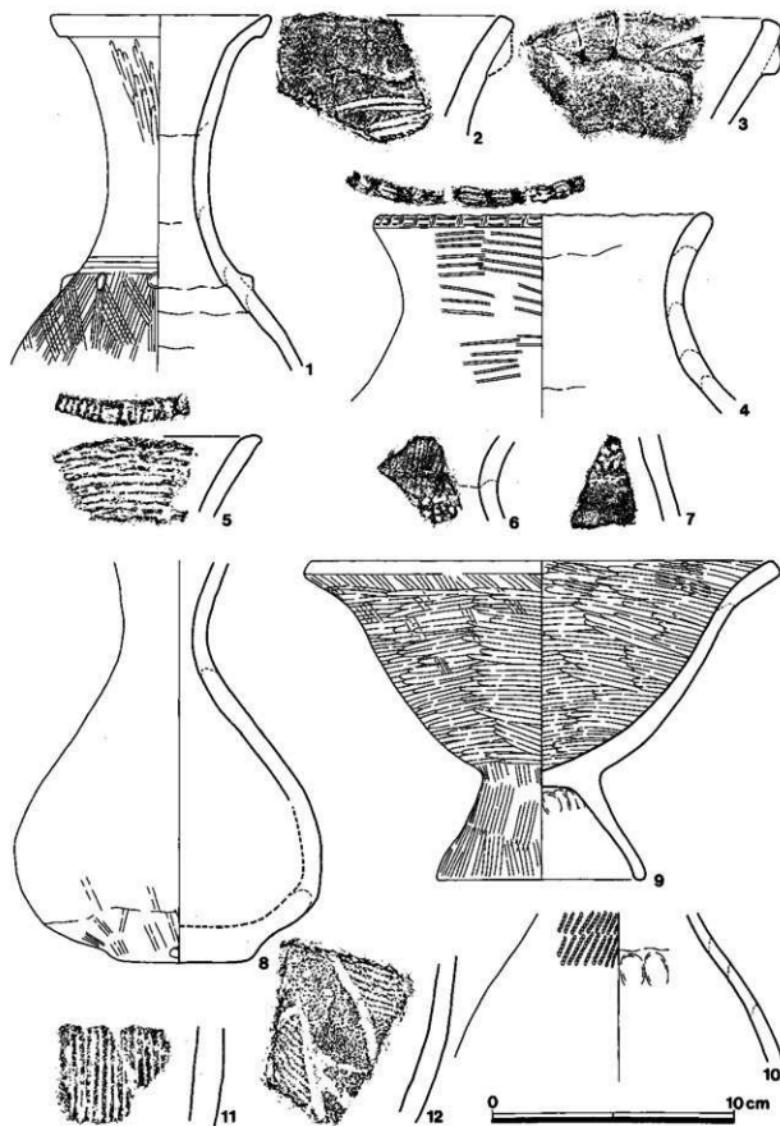
8、9はとともにSD13下層より出土した。8は、細頸壺である。口縁部が欠損する。体部の調整は、表面削落のため不明であるが、底部付近に、わずかに刷毛目が認められる。体部はしもぶくれである。また、焼成前の穿孔が底部付近に施されている。

9は、高环である。器径19.6cm、器高8.6cmである。口唇部は面をもち、横ナデを施している。環部の内外面は、刷毛目後横方向のヘラ磨きを行い、脚部外面に、縦方向の刷毛目を施す。8、9は弥生時代中期後葉の白岩式土器であるといえる。9の高环は、原野谷川流域ではあまりみられるものではなく、菊川流域に顯著に存在するものである。しかし、菊川流域のそれよりは、脚部がやや短いようである。

10は、SD14、15より出土した壺の体部破片である。上部に縄文を施す。弥生時代中期に遡る可能性もあるが、中期には縄文を施す例が少なく、また10の縄文帯が狭いことから、弥生時代後期と考ええた。

11は、SP02より出土した縄文土器である。深鉢形土器の脚部破片である。胎土中には、長石、金雲母、砂粒を含む。半割竹管状工具による平行沈線を施している。縄文時代中期後葉・曾利II式と考えられる。

12は、表採の縄文土器片である。深鉢形土器の脚部破片である。胎土中には、長石、砂粒を含む。原体の繊維が細い縄文を施したのち、半割竹管状工具による沈線区画を行っている。区画した空間は磨消している。縄文時代中期後葉・加曾利EIII式と考えられる。



第10図 出土遺物測図

III まとめ

今回、わずかな調査面積ではあったが、初めて岡津原を発掘調査し、岡津原Ⅲ遺跡の様相を明かにすることができた。箇条書きではあるが、順次記述しまとめにかえた。

1. 岡津原Ⅲ遺跡は、弥生時代中期から後期にかけての時期を中心とした遺跡である。地形からみて、調査地点は遺跡の北限にあたると考えられる。調査地点の周辺に墓域が広がり、集落の中心は南へ広がると推定される。
2. 岡津原Ⅲ遺跡に、生活の跡がみられるのは縄文時代中期後葉である。しかし、調査地点においては、遺構は希薄で、出土遺物もわずかであった。周辺に当時代の遺跡が存在する可能性が高い。
3. 弥生時代中期前葉の丸子式土器が、中期後葉の遺構内から、出土している。これは混入品であるが中期前葉の時期にも、この周辺に遺跡が存在する可能性がある。
4. 弥生時代中期の方形周溝墓を4基検出した。方形周溝墓の年代は、丸子式土器は混入品で中期後葉の白岩式土器の段階を考えておきたい。
5. 弥生時代中期後葉から後期の溝は9条検出した。これも方形周溝墓の可能性もある。しかし調査幅が2m足らずのため、溝の性格を断定することはできない。なお、この中には環濠の可能性のある断面V字溝も存在する。
6. 今回、弥生時代中期後葉の土器を最も多く出土した。白岩式土器の好資料になる。9の高坏は、原野谷川流域では今の所、類例がないものである。

ところで東遠江の弥生時代中期後葉の土器を白岩式土器と呼んでいる。白岩式土器は、基準となりうる資料はまだ少ないが、古段階と新段階の2時期に細分するのが、通例である。白岩式古段階の基準資料にあげられるものは磐田市野跡遺跡のSK171、磐田市権現山遺跡1号、2号方形周溝墓、磐田市新豊院山遺跡D地点の2号墳主体部付近土器棺である。白岩式新段階にあげられるものは、磐田市新豊院山C地点1号方形周溝墓、豊田町広野北遺跡の方形周溝墓である。なかでも広野北遺跡は、最も新しい段階であるといえる。岡津原Ⅲ遺跡の土器は白岩式新段階に該当するが、文様から広野北遺跡よりは古い土器群と考えられる。

〈参考文献〉

- (1) 静岡県民生生活局自然保護課 1973 「ふるさとの自然 西部編」
- (2) 静岡県農地部県営企画課 1973 「土地分類基本調査」掛川・御前崎
- (3) 経済企画庁 1965 「表層地質各論」磐田・掛塚
- (4) 静岡県教育委員会 1968 「東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書」
- (5) 掛川市教育委員会 1982 「掛川市遺跡地図・掛川市遺跡地名表」
- (6) 平野吾郎 1980 「原野谷川流域の古墳群について」『古代探業』

図 版



調査区西側全景（西より）

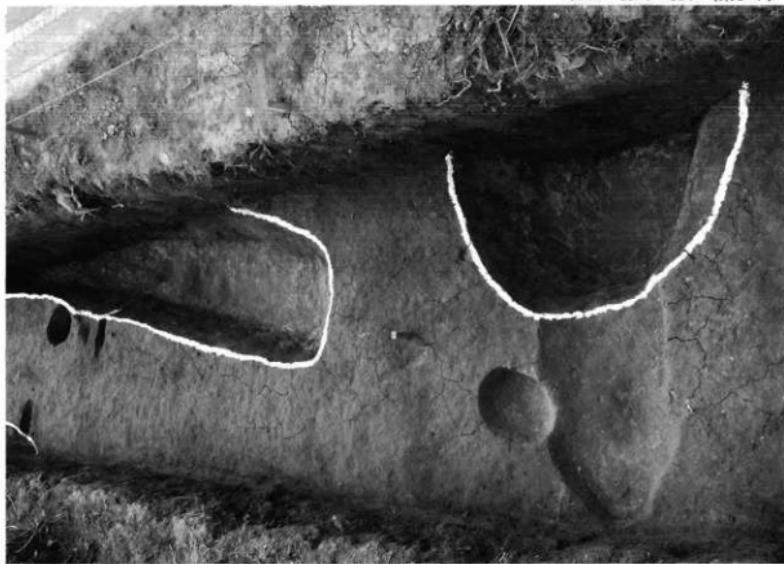


調査区中央部全景（西より）





SD02・SD03・SD04（東より）



SD04・SD05（南から）



SD07 (東より)



SD08 (西より)



SD09 (東より)



SD10 (東より)



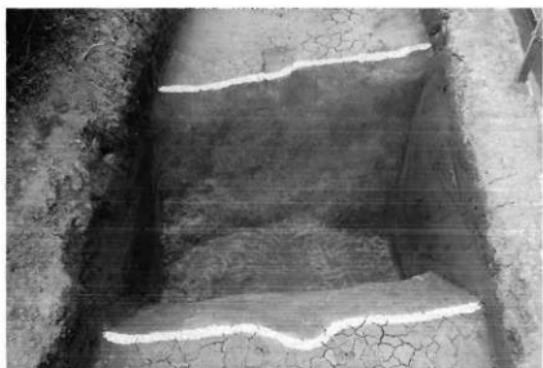
SD11 (東より)



SD12 (東より)



SD13
遺物出土状態（西より）



SD13
発掘状態（東より）



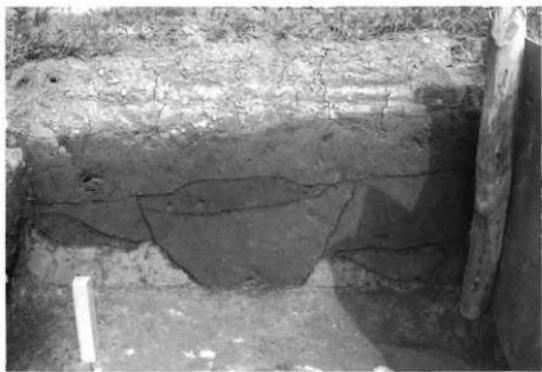
SD14・15（東より）



SP04 (南より)



SX01 (東より)



東端壁面土層



1



8



9



2



3



4



5



6



7



10



11



12

岡津原Ⅲ遺跡

発掘調査報告書

1992年3月31日

編集発行 挂川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (0537) 24 7773

印 刷 株式会社 三創
静岡市中村町166-1
TEL (054) 282 4031

